



Title	ある若年被爆者の軌跡 - 迎洋子さんの場合 -
Author(s)	山下, 達也
Citation	架橋, 4, pp.431-465; 2003
Issue Date	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/28955
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T12:21:22Z

ある若年被爆者の軌跡

— 迎 洋子さんの場合 —

山下 達也

はしめに

一、被爆まで

二、被爆体験

三、「被爆・後体験」

小学生時代

中学生時代

高校生時代

就職

結婚

出産

被爆体験について

姉（七子さん）

妹（久美子さん）

現在の生活

おわりに

はじめに

「戦争の世紀」と呼ばれた二十世紀では、より破壊力のある兵器を他の国に先んじて開発・製造することが、国際関係において力の源泉となっていた。そのような状況の結果として生み出されたのが核兵器である。その意味で二十世紀は「核の時代」でもあった。

一九四五年、広島と長崎に原子爆弾が投下され、人類は「核」の威力の凄まじさを知った。その後も核兵器を国際関係における力の源泉とする傾向は続き、アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国などが核開発を進めた。核保有大国（核大国（ニューヨークリア・パワー））となったのである。二十世紀が「戦争の世紀」と呼ばれると同時に「核時代（アトミック・エイジ、ニュークリア・エイジ）」と呼ばれる所以である。

第二次世界大戦後、大国が核開発を進める中、日本は『日本国憲法』で不戦、平和を誓言した。被爆国として核兵器の開発、保持に反対を訴え続けたが、皮肉にも米ソ冷戦中、日本の安全はアメリカの核軍事力によって保障されていたのである。

戦後四十年以上続いた冷戦の終焉は米ソの安全保障のための軍拡に歯止めをかけた。その後米ソ以外の核保有国も軍縮の動きを見せ、「核時代」は二十世紀とともに終焉するものと考えられた。しかし、二十一世紀に入るやいなや、「核時代」の存続をおわせる出来事が次々と起きた。具体的に言えば、二〇〇一年九月十一日のアメリカでの同時多発テロ、二〇〇三年の北朝鮮核開発問題、イラクの大量破壊兵器問題などである。現在アメリカとイラクは緊張状態にあり、戦争の足音が日に日に近づいている。

このような時代であるからこそ、核兵器が人間に何をもたらすのかということを変更して再認識しなければならぬ。一九四五年八月九日に原子爆弾を投下された長崎には現在も原爆の後遺症に苦しむ多くの被爆者がいる。そこで、著

者は被爆者本人から直接話を聞くことで原爆が人間にどのような影響を及ぼすのかを実証的に考察できると考える。

これまでの原爆に関する研究において、広島・長崎に投下された原子爆弾の破壊力や被害の規模、人間に及ぼした外傷的な被害といったものは明らかにされている。また、被爆者本人が講演などにより、それぞれの被爆体験（八月九日の状況）を語る機会も多い。しかし、原爆に関する研究や被爆者の体験談では、「被爆体験」に焦点が当てられ、その前後のことについての言及は十分とは言えない。（注1）原爆が人々に何をもたらすのかを明らかにするためには、被爆者が被爆前にどのような生活をおくっていたか、そして被爆し、戦後をどのように生き抜いてきたのかということを検証しなければならないと考える。狭義の「被爆体験」だけではなく、「被爆・前体験」・「被爆・後体験」を含むいわば広義の「被爆体験」を理解しなければならないのである。

さらに、現在被爆者自身が記した書物、あるいは研究報告が多数ある。しかし、その多くは被爆後、何らかのかたちで国に対して運動を行なっている人々のものが多く、戦後、運動に加わることとはなかった、いわゆる「普通の」被爆者によって述べられているものは少ない。以上のような現状を踏まえ、著者は、被爆者の本当の姿を捉えるためには、大多数の「普通の」被爆者の歩みを見ていく必要があると考えるのである。

そこで本稿では、五歳で被爆し、現在長崎県長与町に住んでおられる迎洋子さん（一九三九年〜）にインタビューを行い、「被爆前」、「被爆」、「被爆後」それぞれの体験を聞き、迎さんの〈生活史〉というかたちで構成する。

以下、「一、被爆まで」においては、迎さんが生まれてから被爆するまでを、「二、被爆体験」においては、彼女の文字通りの被爆体験を、「三、被爆後体験」においては、被爆してから現在までの歩みについて述べる。

【注】

1 被爆者の「被爆・後体験」にまで言及されているものとして石田忠氏の『反原爆―長崎被爆者の生活史』（未来社・一九七三年）『続反原爆―長崎被爆者の生活史』（未来社・一九七四年）が挙げられる。

一、被爆まで

ここでは、五歳の時に長崎で被爆した迎（旧姓本村）洋子さんへのインタビュー（注1）をもとに、彼女が被爆するまでの生活史を構成する。

迎洋子さんは父・栄三郎（当時四十八歳）、母・ワカ（当時四十一歳）の六女として、一九三九年（昭和一四年）十一月十五日に現在の長崎市湊町で生まれた。上には姉が五人、兄が二人、下には妹が二人おり、十人兄妹の八番目であった。

生まれたところは工場と住居が混在している住宅地であった。地理的には平地で、周りには病院や学校、火葬場などがあった。

父・栄三郎は一八九二年（明治二十五年）に生まれ、小学生のころに両親を亡くしている。それで彼は三菱の職工学校に通い、三菱の職工になった。それからハンマーひとつで仕事に励み、自分の鉄工所「本村鉄工所」を持つようになった。そして鉄工所の横に家を建て、家庭を築いたのである。鉄工所では二、三〇人の従業員が働いており、造船の下請けとして、船の部品をつくっていた。そのため、迎さんは小さいころ毎日工場から「トントン、トントン」と音がしていたという記憶がある。

父は子どもたちに厳しく、上の姉や兄たちには厳格だったが、迎さんは下のほうの子どもということでは比較的甘やかされていた。また、父は町内会長もやっており、家庭だけでなく、地域でも中心的な存在であった。

迎さんの家は先祖代々カトリックを信仰していた。そのため、迎さんは幼少のころから浦上天主堂（注2）まで約

四十分かけて歩いて通っていた。迎さんは教会でのおしえに何の疑問も抱くことなく、純粹におしえを守り、受け入れた。また、憧れから自分もシスターになりたいと思っていた。迎さんは小さいころに両親から比較的甘やかされ、しつけられるということがあまりなかったため、教会でのおしえが彼女の自我形成に大きく関わった。迎さんは五歳という若年で終戦を迎えるが、大きな出来事については戦時中の記憶もある。

二、被爆体験

一九四五年（昭和二十年）八月九日、迎さんの家の二階では、迎さんよりも十一歳上の姉・節子さん（当時十六歳）が風邪のため寝ており、姉の友人が二人お見舞いに来ていた。迎さんより二歳上の姉・七子さん（当時七歳）と迎さん本人（当時五歳）、二歳下の妹久美子さん（当時三歳）、三歳になる長女智恵子さん（昭和二十年七月死去）の子どもの四人も二階におり、風邪で寝ている節子さんを取り囲むようにして座っていた。小さい子どもたちがいるということで、見舞いに来ていた節子さんの友人二人も一緒に「先生、ここ」をして遊んでいた。迎さんたちは節子さんの友人の一人に「あなたたち、歌をうたいなさい」と言われ、まずは七歳の姉七子さん、そして迎さんが歌った。三歳の妹・久美子さんは「私はどら声だから歌いきらん」と言ったので次に長女の子が「七つの子」を歌いはじめた。そして長女の子が歌い終わつたと同時にピカ一ツと光り、すごい音がなつた。午前十二時二分、アメリカ力によつて原子爆弾が投下されたのである。迎さんの家は爆心地から一、四キロ離れたところにあつた。（注3）

迎さんはピカ一ツと光つた瞬間うつ伏せになつた。迎さんは右膝の上を火傷した。その日はワンピースを着ていたが、それは燃えてボロボロになつた。同じ場所にしたにもかかわらず、歌をうたつていた長女の子は原爆で飛ばされ、すぐ亡くなつた。お見舞いに来ていた姉の友人二人はけがですんだが、風邪で寝ていた節子さんはガラスの破片を正面からあびてひどいけがで九月一日に亡くなつた。七歳の姉・七子さんは崩れた家の下敷きになつていて近所の人助けようとするが、なかなか体が抜けなかつた。近所の人「片輪になつてもいいの？」と聞くと、「片輪になつてもいいから引っぱりだしてくれ！」と父が言ったので、無理やり体を引っぱつて出された。そのためひどいけがだつ

た。迎さんの隣にいた妹の久美子さんはひたひたに傷を負った。

空がピカーツと光った後、二階建ての家が一瞬で潰れてしまったのである。迎さんはしばらくして起きあがると「痛い、痛い」という声が聞こえ、どうしようかとウロウロしているところに鉄工所から父が来て迎さんを庭へおろした。そして、一階の八畳の間にいた姉の清子さんが梁の下敷きになっていたので助けた。

原爆が落とされる時、父は鉄工所の中にいた。ピカーツと光った瞬間鉄工所の中から外を見ると、真赤な原子雲が見えた。次の瞬間ガーツというすごい音と揺れに襲われた。そして家が心配ですぐに駆けつけている。中学生だった兄の保さん(当時十四歳)は昼寝をするため、押入れの中に入っていた。それで助かっている。母は家の外で被爆したため、四日後の八月十三日に亡くなった。

被爆した後、母と節子さんは稲佐小学校で治療を受けていたが、そのままそこで亡くなった。七子さんはけががひどく、稲佐小学校から大村の国立病院にうつされた。そこで七子さんは「私の体がこんなになってしまった。歩けない。私の体をこんなにしたアメリカ人を連れて来い！殺してやる！」と言って騒いだ。他の家族も小学校にいて治療を受けているという状態であった。このように、迎さんの家族は全員被爆し、寝込んでいたため、被爆後、迎さんと妹の久美子さんは近所のおばさんに連れられて病院の防空壕へ火傷の治療を受けに行っていた。八月十三日、防空壕へ治療を受けに行く途中、母の死体が担架にのせられて焼かれに行っていた。そこで「お母さんにお別れ下さい。」と言われ、手を合わせて心の中で「さよなら」と言った。あとはおばさんに連れられて母が焼かれるのを振り返り振り返りしながら行つた。死体がたぐさんあったため、それを担架で運んで寝台の鉄の枠だけしかないものの上のせ、

どんだん焼いていたのである。迎さんはこの時五歳で母親を亡くしているため、母親のことはあまり記憶になく、母の生年月日なども知らない。

父は被爆後、母が亡くなつてからは錢座小学校で治療を受けていた。黒い便が出たり、熱が出たりして絶対に動いてはいけないという状態だった。父は清子さんを見ていて「何かおかしいな。」と思ひ、「俺はここでこんなしておれん、俺は帰るんだ!」と言つて医者の方を聞くことを聞かずにリアカーにのつて家に帰つてきた。そこで家族の死を知つたのである。

当時長男は学徒動員(注4)で三菱兵器へ行つていて、そこで被爆している。なかなか家に帰つてこないのもう死んだと思つていたら、汽車に乗つて帰つてきた。駅のあつた浦上は焼けてしまつていたため、道ノ尾から出た汽車にたくさんの人が乗つた。死んだと思つていた息子が帰つてきたということでは喜んだ。その時、父が「お前がこの鉄工所の後を継いでくれるか?」と聞いたら長男が「いいよ」と言つたので戦後は父と長男で鉄工所をやることになつたのである。

父が家に帰つてきたころ、迎さんは足の火傷がじゅくじゅくうずいて毎晩泣いていた。病院にもつけるものは何もなく、ただ消毒に行くくらいのものでした。妹もひたいをやられていて毎晩「痛い、痛い」と言つて泣いていた。それで父におぶわれて海岸を行つたり来たりしていた。

馬の油をつけると火傷が治るといふことで、馬のいる次女の嫁いだ実家まで連れて行つてもらつた。その家までは五キロ以上あつたが、迎さんより妹のほうが太つたため、妹を兄が、迎さんを姉がおぶつて、途中で何度も休み

ながら歩いて連れて行ってもらった。そしてそこで五日間火傷に馬の油を塗った。それでも痛みは治まらず、ヒリヒリして毎晩泣いていた。

原爆で焼け野原になったものの、土地はあるので姉の清子さんが耕して畑仕事をした。残っていた着物を百姓のところを持って行って種芋と交換してもらい、そこでさつまいもやじゃがいも、たまねぎを作った。

迎さんの家族は全員被爆し、それぞれの傷を持つことになったのである。

迎さんは原爆が投下されたときのことについて、次のように言う。

「運ですよ。運がいい人は助かっているし、運のない人は死んでいってます。同じ場所にいても生きてる人もいれば死んだ人もいます。けがの程度も全然違います。運ですよ。」

【注】

1 このインタビューは二〇〇三年（平成十五年）二月十七日に長崎大学教育学部附属教育実践センター共同研究室にて同氏と安部俊二教官、政治学セミナーの学生である堀田麻衣子、そして筆者によって行われた。また、迎氏のクラスメイトである平山千枝子氏と紹介者である野口千寿子氏が同席された。

2 司教座聖堂。一八七三年（明治六年）迫害に耐え信仰を貫いて、八八二人が旅から荒廃した郷里に帰ってきた

て、今の教会の礎となった。一九四五年（昭和二十年）原爆被災、わずかに遺壁を原爆公園に残すだけであるが、一九五九年（昭和三十四年）に再建。一九八〇年（昭和五十五年）赤レンガで改装して昔日の面影に復し、教皇ヨハネ・パウロ二世を迎えた。『長崎県大百科事典』長崎新聞社・一九八四年

3

長崎原爆被害総合報告『原爆被害の実相―長崎レポート』（NGO被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会・一九七七年）によると、爆心地から半径一・五キロメートルの地点では、爆風で木造建物は主に継手が破壊され全焼。熱線で四度の熱傷（熱傷の最も高度なもの）を生じさせ、人が強い放射能障害を受ける距離である。

4

一九四一年（昭和十六年）十一月「国民勤労報国協力令」が公布され、年齢十四歳から四〇歳までの男性、年齢一四歳から二五歳までの未婚の女性は国民勤労報国隊を組織し、国家総動員業務に従事させられることになった。『ヒロシマ・ナガサキ 死と生の証言』日本原水爆被害者団体協議会・一九九四年・五九〇頁

三、「被爆・後体験」

ここでは、迎洋子さんへのインタビューをもとに、彼女が被爆者として戦後をどのように生きてきたのかを生活史として構成する。

小学生時代

太平洋戦争で日本が敗戦した翌年の一九四六年（昭和二十一年）、迎さんは長崎市立稲佐小学校に入学する。小学校は家から歩いて十分の距離だった。

迎さんは小学生の時は健康状態は良かったものの、膝の上の火傷を人に見られるのがすごく嫌だった。体育の時、女子はブルマをはかなくてはいけないため、その時膝の上の火傷が見えてしまうのが一番恥ずかしいことであった。しかも、冬になると運動した後には肌が真っ白になり、うるこのようになった。どんなに寒くても足を水で洗ってしまわないととに戻らない。このことで迎さんは強い劣等感を感じていた。彼女はダンスが好きで、宝塚歌劇団に憧れていたが、「足がこんな状態だからどうせなれないだろう。」と思っていた。成長して足が大きくなるにつれて火傷の痕も大きく広がった。

一九四八年（昭和二十三年）十二月に原爆障害調査委員会（ABC）（注1）が長崎に設置された。この時迎さんは小学校三年生であつた。この時から原爆障害調査委員会の車が学校まで来て、授業中でも呼ばれて連れていかれるようになった。学校にいる他の子どもたちは「車でいいな」と言つて窓から覗いていたが、迎さんは「なぜ自分だけこんなところで裸になつて精密検査を受けなければならないのか」と嫌な思いをしていた。原爆障害調査委員会の検査はこの時から現在までずっと続いている。

迎さんは自分の中で劣等感を感じたり、嫌な思いをしているが、外見上のひどい傷や症状がないため、被爆したことで他の子どもからいじめられるということはなかつた。しかし、姉の七子さんはけががひどく、右足と左足の大きさが違つて歩き方が周りとは違つたため、「びっこ、びっこ」と言われ、いじめられていた。しかし、七子さんは気が強くて意地もあつたため、男の子にもむかつていつていた。迎さんも七子さんがいじめられたということをきくと、齒痒くて七子さんの加勢に行つていた。

小学生のころは男の子も女の子も関係なく、缶けりや鬼ごっこをして遊んでいた。山が遊び場だったため、蛇や猪が出てきて、それに石を投げたりしていた。

家に帰ると母親がいないため、飯炊きをしていた。小学生の頃の途中で父が再婚して新しい母親がきたが、その母親も被爆しており、体が弱かつた。迎さんや七子さん、妹の久美子さんはまだ小学生だったため、新しい母親を自然に受け入れ、「お母さん、お母さん」と呼んでいた。しかし、上のほうの兄弟は新しい母親が入ってくるのに反対していた。

家の近くには淵神社（注2）があり、そこでは毎年「稲佐くんち」があつていた。小学生の頃はそこで踊るのがいちばんの楽しみであつた。「稲佐くんち」では女相撲があつており、姉たちが出ていた。クリスマスチャンとして教会へ行く一方で神社のお祭りに行くことに違和感は全く抱いていなかった。

学校での成績は良く、クラスメイトにも人気があつて、学級委員をしたこともあつた。

中学生時代

一九五二年（昭和二十七年）四月、迎さんは長崎市立淵中学校に入學する。中学校も家から歩いて約十分で行けるほど近かつた。中学校は一学年に十学級あり、全校生徒は一五〇〇人ほどいた。制服はなく、迎さんはブラウスにスカートという格好で登校していた。

運動が好きだつたため、中学校では体操とソフトボールをしていた。本を読むことも好きで、夏目漱石などの文学作品をよく読んでいた。この頃将来のことを真剣に考えるということはなく、ただ漠然とお嫁さんになりたいと思つていた。

この頃迎さんの家には父と新しい母、七子さん、久美子さん、そして兄夫婦が同居していた。さらにお手伝いさんもひとりいた。家の中は大人ばかりでその中には他人もいるということ、迎さんはこの頃から大人の目を気にし、気をつかいはじめていた。家の中では体が健康なほうだつたため、「あれをしなさい、これをしなさい」と言われてよ

くつかわれた。カトリックのおしえのおかげで反抗期はなかったものの、そういう家の状況が嫌で、なるべく家に帰らないように外で遊んでいた。

迎さんが中学校三年生の時、新しく来ていた母親が胃ガン、子宮ガンで亡くなった。被爆したことが発ガンの原因だった。これで迎さんは母親を三回亡くしたことになる、原因はどちらも原爆であった。父親はその後再婚することはなかった。

修学旅行で宮崎の青島や鹿児島島の桜島に行ったという思い出はあるが、複雑な家庭環境のせいもあって、中学校生活全体としてはいい思い出はなかった。

高校生時代

小さい頃からシスターの服に憧れていたこともあって、高校はカトリック系の私立長崎純心女子高校へ行きたいという気持ちがあった。しかし、他の家族は不信仰でそういうミッション系の高校にはやりたくないという感じだった。

さらに、鉄工所の会計は身内がやったほうがよいということがあったので、迎さんは家の鉄工所の会計をするために一九五五年（昭和三十年）、長崎女子商業高校へ進学した。高校へはバスで通学していた。

迎さんが長崎女子商業高校へ入学したのは、家の鉄工所の会計をするからであったが、本当は女子商業で演劇をしたいという思いからでもあった。男性がいると恥ずかしくてできないが、女性ばかりならばしたいということで女子

商業に憧れて行った。しかし、迎さんが入学した一九五五年（昭和三十年）に長崎女子商業高校の演劇部は廃部になっていた。それで彼女はがっかりして、火が消えたようにおとなしくなった。読書ばかりして全然おもしろくない高校生活を送った。

高校生の頃一度だけ父親と姉の七子さんと迎さん、妹の久美子さんの四人で熊本に旅行に行ったことがあった。父親はそれまで仕事ばかりを一生懸命にやっていたため、子どもと旅行をするのは初めてだった。これが父親との最初で最後の旅行であり、迎さんにとって、印象深い出来事となった。

迎さんが高校一年生の時、当時高校三年生だった姉の七子さんが「原爆乙女の会」（注3）に入った。七子さんはその活動で東京や大阪へ行っていた。迎さんは七子さんの体が悪いからということと七子さんの付添い人としていろいろなところについて行った。会の中には原爆にあつていているということだけで嫌われ、恋愛もできずに自殺した人がいた。また、会合では「十歳までに被爆した人はガンになりやすい」というデータが出たり、結婚した人に小頭児が産まれたといったことを聞いて迎さんは大きな不安を感じた。

高校生の頃も家庭の状況が嫌で卒業したら家を出たいと思っていた。

就職

しかし、家には病人ばかりいるためそうするわけにもいかず、しかたないという心境で家の鉄工所の会計をするこ
とになった。自分というものを持たず、家のことでふりまわされていたのである。

一九五八年（昭和三十三年）に長崎女子商業高校を卒業し、その年の四月から家の鉄工所の会計として仕事を始め
た。給料は月に五千円だった。

同じ年の十二月末、父親が脳梗塞で倒れた。その後五年間病床生活をおくり、七十二歳で亡くなった。

父親が倒れてからしばらくして、迎さんの体も変調しだした。事務をやっていると、手足の力が抜けた。そして夜
になると眠れないという日が続いた。仕事ができないので病院へ行くと結核と診断され、二十歳の誕生日に福岡の療
養所に入った。結核の薬を飲んだ時、副作用で四十度近い高熱が出て、全身痛くてしびれたことがあった。そして診
断をうけてから三カ月後に検査をしたら、最初と全然変わっていないということ。結核ではないということになり、
「あなたはここにいるより、長崎にいるほうがいいでしょう」と言われた。

長崎に戻ってから手足の痛みはなくならず、検査をしてもその痛みの原因が何なのかもわからなかった。漢方薬
を飲んだり、お灸をしたり、東洋医学の治療などあらゆることをしたが、効果はなかった。これは原爆病だと思つた。
長崎大学病院で検査・入院を繰り返した。

この時、「貧血」と「出血性素因」と国から認定（注4）され、医療手当が支給された。迎さんはけがをして出血
すると、血が止まらないのである。それで体にはいつも青いあざがあった。爪を切るときでも血が出ると止まらない
という状態だった。そのため、多量の出血を伴う大きい手術はできないと言われた。

また、検査によってピリン系の薬の使用は禁じられた。一度痛み止めでピリン系の薬を飲んだ時、足の先から頭の
てっぺんまでしびれて倒れたことがあった。その時は大きな声を出して泣き、その泣き声を聞いた姉が助けにきた。

姉が大病院に電話すると、「すぐに連れて来てください」と言われたので立とうとしたら、全身がしびれているため、倒れてしまう。何とかタクシーで大病院へ行き、注射を打ってもらってやっとしびれがとれた。この経験があったため、それからは菓を飲めないぶん、食事に気をつかって健康を保とうとするようになった。

このように、働きだしてから一、二年で体の調子が悪くなり、結局家の鉄工所の会計という仕事はすぐにできなくなつたのである。

結婚

体の調子が悪くなつてから、結婚するということは考えられなかった。この頃、姉の七子さんが「原爆乙女の会」で知り合つた男性と結婚し、健康な子どもを産んでいたということもあつたが、やはり被爆者が子どもを産むと小頭児が産まれるかもしれないということが怖かつたし、自分の体が今の状態では迷惑をかけるだけだと思つていた。そのため、男性の友人はたくさんいたが、結婚を考えて付き合つという人はいなかつた。また、自分が被爆者であるということに加えて、カトリックであるということも結婚を考える際、迎さんの負担となつていた。当時カトリックの信者は他の宗教の人と結婚する場合、相手をカトリックに入れなければならなかつた。もし相手がカトリックの信者には絶対にならないという場合には生まれた子どもが洗礼をされた。それができなければ結婚式は挙げられなかつたのである。したがつて、迎さんが結婚するためには、相手が、被爆者であつてもよいということと、カトリックの信者になつてもよいということの二つを満たした人でなければならなかつた。

上のほうの姉が父の紹介で佐世保に齒科を開業していた男性と結婚していた。今の迎さんの夫が偶然その齒科に車のセールスで来ていた。そこで気に入られ、長崎まで遊びに連れてこられたのである。その時迎さんは妹の久美子さんと映画を観に行っていた。「今から家に帰る」と家に電話すると、「佐世保からお客さんがきているからケーキを買ってきなさい」ということだったので、ケーキを買って帰った。それが初対面である。はじめは交際するなんて思ってもみなかった。むしろ、妹は内気で男の人と交際することがなかなかできなかったで、「この人が妹を好きになってくれたらいいなあ」と思っていた。結局は迎さんが交際することになったが、交際する前に、迎さんは、「私は被爆者です。体は今こんな状態です。そして私はカトリックです。それでも交際しますか？」と聞いた。すると、「自分は健康だから、弱いあなたを包んであげましょう。」という答えが返ってきた。それから交際が始まった。

そして一九六四年（昭和三十九年）十月、ちょうど東京オリンピックが行われた年に結婚する。

結婚しようという話になった時、迎さんがいちばん気がかりに思っていたカトリックに入ってくれるかということも無事に受け入れてもらえた。相手方の母親が「宗教というものはたどるところはひとつしかないんだから、宗教を守る人はいい人よ」と言ってくれ、心配していた相手の家からの反対もなかった。

結婚してからは佐世保に四年間住んでいた。夫がカトリックに入るということで、佐世保の教会に行ってもらっていたが、「カトリックは何を言っているのか意味がわからない」という感じだった。初めにカトリックのおしえがよく教育されなかったため、その後教会へはクリスマスの際に行くくらいで、普段は行かなくなった。子どもができたから家族みんなで教会に行くのが迎さんの小さい頃からの「憧れ」だったが、子どもが小さい間はいろいろと忙しく、自然に足が遠のいた。

その後、夫は迎さんの兄が父の後を継いでいた本村鉄工所の営業マンとして働くことになり、一九六九年（昭和四十四年）長崎に来た。その頃鉄工所は長崎市から諫早市に移動しており、従業員は四、五〇人に増えていた。

出産

子どもは一九六五年（昭和四十年）に長男、一九六七年（昭和四十二年）に次男が生まれた。やはり出産する時に不安があった。「小頭頂が生まれたらどうしよう。五体満足で生まれてくれ。」と願った。二人とも健康に生まれた。二人目の子どもを妊娠した時、甘いものがほしくて、たくさん食べていた。そのうちに虫歯ができ、妊娠中は治療ができないから、出産後に治療をした。虫歯になっていた歯を抜いた時、出血が全然止まらなかった。歯を抜いた日の翌日の朝まで出血しつづけた。希望として子どもは四人ほしいと思っていたが、妊娠するとまたこういうことがあるかもしれないということで、二人で終わった。

被爆体験について

二人の子どもができ、成長していく中で、迎さんは自分の被爆体験を子どもたちに話さなければならぬという気持ちにはあった。しかし、いまだによく話していない。話す機会をつくることもなく、何となく逃げてきている。

「親の痛みというものを親から言うのは嫌なんですよね……。私にとってはいちばん苦しい、悲しい出来事でしょう？そういうことを子どもに言うというのはね……。言いくらいとか何とか何と云うか……。他人にはこうして話すことができるんだけどね、これが我が子になるとこんなふうには話せないですよ。」

このように、迎さんは自分の体験について詳しくは子どもたちに語っていない。そのため、子どもたちは母親が爆し、身内が死んだということだけを知っている。

迎さんが、子どもたちに多くを語ろうとしないのは、被爆体験が恐ろしい出来事であったからということだけではない。迎さんは小さい頃から大人の中で育ち、大人の汚い部分を見て、そういう大人に気をつかいながら家にいた。そのため、中学生や高校生の頃は家に帰りたくないと思っていた。そんな思いを自分の子どもたちには絶対にさせたくないという気持ちからも、自分の体験をあまり話さないようにしていたのである。

姉・七子さん

迎さんより二歳年上の七さんは、前にも述べたように、原爆による被害がひどかった。被爆した時の年齢は七歳であった。被爆後治療を受けていた大村の病院では、「私の体がこんなになってしまった。歩けない。私の体をこんなにしたアメリカ人を連れて来い！殺してやる！」と言って騒いでいた彼女は、気が強く、活発だった。

彼女は小学校に入学すると、「びっこ、びっこ」と言われていじめられた。それでも負けん気が強いので、運動会の時には走るのが遅くても必死に走った。

中学校に入学すると学校の成績が良く、弁論大会などによく出ていた。中学校二年生の時には、原爆で損傷していたひじと足に移植手術をした。歩く時にびっこをひくのは目立たなくなったものの、右足と左足の大きさは違い、靴は足に合うものを注文しなければならなかった。そのため、思春期にはハイヒールをはきたいのにはけない悔しさがあった。

このような性格や経験から、七子さんは迎さんに比べ、原爆に対する憎しみや恨みが深い。それが高校生の時、「原爆乙女の会」への参加というかたちであられるのである。

高校はプロテスタント系の私立長崎活水女子高校を受験し、合格した。ちょうどこの時、兄が結婚するという話があつて、結婚式を挙げようとしていたが、家族の中にプロテスタントの学校へ通う者がいるので、結婚式は挙げられないということになった。すでに制服やかばんなどの入学用品も全部そろえていたが、兄の結婚式が挙げられないということで、七子さんは私立長崎活水女子高校へは行けなくなった。このことがきっかけで七子さんはカトリックに対して憎しみを覚えた。それからは彼女は教会には行かなくなった。

迎さんたち家族のみんなは、七子さんは体も弱く、目に見えるところを原爆でやられているから結婚はできないだろうと思つていた。しかし、七子さんは高校を卒業してからも「原爆乙女の会」で活躍を続け、そこで出会った男性と結婚し、子どももできた。七子さんは体が弱く、すぐに熱を出していたが、結婚して子どもができる、心の支え

があつてか、体質が変わり、強くなった。ただ、原爆病の貧血だけはずっとあつた。

四十六歳になった時、七子さんは胃ガンになった。白血球は一八〇〇くらいに落ち込み、ガンの手当てが支給されるようになった。原爆病院に入院して、七子さんはいつも「私はこのガンで手当てをもらいたくないよ。私が手当てをもらうのなら原爆でやられたこの足でもらいたいよ」と言つていた。

七子さんは胃ガンを患つてから四年後、子どもがちょうど二十歳になつてから亡くなった。戦後四十三年間、被爆者として青春期に「原爆乙女の会」で活躍し、結婚後は東京へ行き、戦後を生き抜いた。享年五十七歳であつた。

妹・久美子さん

迎さんより二歳年下の久美子さんは原爆でひたいのすぐ上のところに傷を負つた。被爆したのが三歳の時で、その時母親を亡くしたため、二十歳の清子さんの乳房をにぎつて寝ていた。

久美子さんは頭に傷を負つた影響で、血管が細くなり、日の光を見ただけでまぶしかつた。また、学校の校庭で話があるときは貧血で倒れていた。

高校生の頃、結核を患つて入退院を繰り返していた。その後久美子さんは結婚をした。しかし、結婚してから半年がたつて、頭をどこかに強くぶつけ、突発的脳内出血を起こした。二回手術をし、何とか命だけは助かつたが、左半身不随、右目失明という状態になった。それが原因で離婚し、それから十年間入院生活をおくつた。十年間リハビリをして自分で歩けるようになった。

退院してからは佐世保に嫁いでいた姉が久美子さんの面倒をみた。しかし、その姉が病気で倒れてからは迎さんが久美子さんの面倒をみるようになった。その時、兄たちから「姉さんは久美子の面倒をみて倒れたんだから、お前もいつか倒れてしまふよ。やめておきなさい。」と、久美子さんを引き取ることに反対されたが、迎さんは反対を押し切った。これを契機に迎さんと他の兄弟とのあいだに距離ができた。迎さんは妹のことについて他の兄弟と話をしても全然話が交わらないという。その原因は妹に対する思いの原点の違いであった。

「妹がかわいいという気持ちは同じなんでしようけどね。兄たちは真剣に妹の病気のことを考へているのかなあと思いますよ。妹の話をしても平行線なんです。私は原爆にあった後もずっと妹とふたりで防空壕をまわったりしてましたからね。兄さんたちとは妹を思う気持ちの原点が違ふんですよ。そうやって今は話せるようになりましたけどね。」

迎さんは結婚してからは健康食品関係の仕事をしていた。幼い子どもが二人いて、そのうえ、久美子さんの面倒をみることになったのである。久美子さんは右目が見えなくて、左目の視力も悪かったため、物がよく見え、私の物が盗られた！私は意地悪されてる！」と言っていた。迎さんが「そうではなくて、見えていないだけだよ」と言っても久美子さんはわからない。迎さんは久美子さんのわがままがストレスになり、五十歳の時に網膜剥離になった。それで久美子さんの面倒はみられないので、どこかにあずけようということになった。しかし、久美子さんはその時四十八歳で受け入れ先がなかなかなかった。六十歳を過ぎないと身体障害者を入れるところはなく、入れるところは小児麻痺や障害児のための施設がなく、久美子さんがそこは嫌だと言った。探し回ってやっと原爆被害者特別養護ホーム「かめだけ」（注5）に入るようになった。

ホームに入ってから迎さんが行ったり来たりして、生活用品を整えた。久美子さんを家に連れて帰って一週間くらい一緒に過ごすこともある。

しかし、久美子さんからは毎晩電話があり、「はやくここからだしてよ!」と言われる。迎さんは久美子さんの気持ちをわかつてはいるものの、久美子さんがわがままばかり言うのでついカツとなつて「好きにしなさい!」と言つてしまふことがある。すると、久美子さんは「じゃあ、出て行く!」と言つて電話を丹チャツつと切るといったことがよくある。

ホームでは毎年誕生会が開かれている。誕生会には家族の人もよばれ、迎さんは行つていた。八十歳、九十歳の人がたくさんいるなか、ひとりまた五十代の久美子さんが「もうここに入つて十年になります」と言う姿を見て、迎さんは悲しさに耐えられずに涙を流した。毎年誕生会がくるたびに逃げ出したくなつていた。しかし今年、誕生会に家族の人はよばなくなつたとホームの人に聞いてホツとした。

久美子さんは「お父さん迎えに来て。はやくお父さんのそばに行きたい」といつも言つており、一度自殺しようと考えたことがあつた。そのことを知つた迎さんは長与に土地を買つて家を建てることを決意した。そして、久美子さんに「私の家が先に建つか、あなた病気が治るか競争だよ。もう変なこと考えないで病気を治すことだけに専念しなさい」と言つた。この言葉で久美子さんは思いとどまつた。しかし、迎さん自身も久美子さんと二人でどこかへ行つてしまおうと考えることがある。

「妹は原爆の時に死んでいればよかつたと思つてますよ。私なんかもそうかもしれません。動

けなくなったりすると、悪魔がくるんですよ、頭の中に。もう妹を連れてどこか行こうと思うんです。今頭の中はいつも妹のことですよ。これからこの妹をどうしようかなと思います。もし自分が病気で倒れたらどうしようかとか……。」

迎さんがいちばん避けたいと思っっているのは、自分の体が悪くなってホームへ行けなくなり、子どもたちに代わりをしてもらわなくてはならないというケースである。迎さんは、「妹が先に亡くなるのを見送って、そのあとを私がついていくというのがいちばんいいんですけどね」と言う。

現在の生活

今の生活の中でいちばんの楽しみは一週間に一回通っているフラメンコである。ほんの一時間だが、その時は踊ることに没頭できる。推理小説が好きで本もよく読んでいる。

国から月に五万円の手当てをもらっている。迎さんは食べ物で健康を保つことに神経をつかっているため、そのお金はほとんど健康食品のためにつかっている。なるべく病院には行かないようにしている。ピリン系の薬がだめだということもある上、被爆しているから治療費が無料ということが嫌なのである。戦争の犠牲者はたくさんいるにもかかわらず、被爆者だけが特別扱いされることに引け目を感じている。

今後の生活については、彼女は次のように言う。

「今の生活の延長でしょう。死ぬまで。しがらみにまとりつかれて。苦勞は自分だけでいいですよ。今まで自分の家族を何十年も犠牲に生きてますからね……。子どもが小さい頃も子どもをおいて妹の世話をみますからね。あの時よく我慢してくれたなと今になって思います。でも『原爆のせいだ……。』とは思わないんですよ。ただ今のことだけで一杯なんです。だから今後はどのように過ごしたいというのはありません。」

現在迎さんは六十三歳、五人の孫がいる。手術を重ねた目も疲れたらすぐに赤くなるものの、落ち着いている。毎週教会に通い、肺がんの夫の看病をしながら、無理しない程度に妹の世話をみて暮らしている。

【注】

- 1 Atomic Bomb Casualty Commission (原爆傷害調査委員会) の略称。アメリカが「原爆放射線によって人体における医学的影響を幅広く長期間にわたって調査研究すること」を目的として、トルーマン大統領の命令により、一九四七年開設した。日本政府は四十八年以後、国立予防衛生研究所の支所(広島及び長崎原子爆弾影響研究所)を設け、これに協力してきた。(石田忠『反原爆―長崎被爆者の生活史』一九七三年・未来社)
- 2 田心姫命、市村島姫命、湍津姫命を祀る。天正年間(一五七三年〜一五九二年)にキリシタン教徒に焼かれた。

- 一六三四（寛永十一）年、延命寺の開山・教宣がこの地に宝珠山万福寺を建て、一六四七（正保四）年、弁才天を祀り「稻佐弁天社」と呼ばれ、淵村の総鎮守として尊崇を受けた。明治の神仏混淆の禁令とともに「淵神社」と改め、一八七四（明治七）年に村社となった。一九四五（昭和二十）年に原爆の災禍に遭い、一九六〇（昭和三十五）年鉄筋コンクリートの社殿が再建された。例祭は十月二十日、二十一日で「稻佐くんち」と呼ばれ奉納相撲がある。（『長崎県大百科事典』長崎新聞社・一九八四年・七五三頁）
- 3 広島の「原爆乙女の会」一九五二（昭和二十七）年について長崎でも山口仙二、谷口稔嘩、渡辺千恵子によって「長崎原爆青年乙女の会」が発足する。（長崎原爆被害総合報告『原爆被害の実相―長崎レポート』NGO被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会・一九七七年）
- 4 「原子爆弾の傷害作用に起因して負傷し、又は疾病にかかり、現に医療を要する状態にある被爆者」は医療の給付を受けることができる。ただし「当該負傷又は疾病が原子爆弾の傷害作用に起因する旨の厚生大臣の認定を受けていなければならない。（石田忠『反原爆―長崎被爆者の生活史』未来社・一九七三年）
- 5 長崎県被爆者手帳友の会を設置母体として、一九八〇（昭和五十五年）七月長崎県西彼杵郡西彼町上岳郷字松川内一六六三番地に、敷地は地元西彼町より造成のうえ無償で貸与をうけ、施設は日本小型自動車振興会、長崎県、長崎原子爆弾被害者対策協議会等の補助団体、その他多くの人たちの浄財により建設された。事業の運営は国、長崎県、長崎市の補助で財団法人被爆者福祉会が運営している。収容定員は五〇人。（『原爆被爆者対策事業概要』長崎市原爆被爆者対策事業概要・一九九二年）

おわりに

一九四五年八月九日、長崎に原爆が落ちたその日、迎洋子さんは五歳という若年であった。そのため、一生の大部分を占めるのは「被爆後体験」である。つまり、人生のほとんどを「被爆者」として原爆後遺症の不安定な身体の健康に留意しながら、懸命に今日まで生きてきたのである。

被爆後、迎さんが「運動家」の道を辿らなかつたのはなぜであろうか。それは「運動家」の道を辿つた姉の七子さんとの比較から明らかである。

第一に、被爆後被差別の程度の違いである。七子さんは原爆の被害が外観に表れているため、小学生の頃からいじめにあつている。それに比べ迎さんはひざの上にケロイドがあり、自分の中で劣等感を持つてはいたが、周りからいじめられるということはなかつたのである。

第二に、家庭内での役割の違いである。七子さんは体が弱く、家の仕事はあまりできなかつた。一方家には病人が多いなか、迎さんは学生時代は健康であつたため、家の仕事をしていた。七子さんは運動に奔走したが、迎さんにはそのような余裕はなかつた。

迎さんは被爆後の体験や置かれた状況によって「運動」には距離をおくことになつたのである。同じ家族であつても、被爆時の年齢や被害の程度、家での役割によってその後の歩みに大きな違いがある。

「運動家」としての道を辿ることはなかつたが、迎さんの被爆後の人生には常に「原爆」がつきまとつた。そのひとつが妹の久美子さんのことである。現在迎さんの最も気がかりな久美子さんのことも、その原因を原爆にみる事ができる。しかし、常に原爆につきまとわれながらも、迎さんは健康を保つために食品に細心の注意を払つたり、久美子さんの世話を積極的に行つたりと彼女なりに主体的に、力強く生きている。迎さんの原爆との闘いは現在もおおつており、決して終わることはない。迎さんの話から、「原爆は人に何をしたのか」ということを考察するためには、

「被爆体験」そのものよりもむしろ、「被爆後・体験」に焦点をあてるべきであると思われる。

迎さんは戦後つくられた「平和公園」や長崎出身の彫刻家・北村西望（注1）によつて爆心地につくられた「平和祈念像」に違和感を覚えていた。迎さんの兄が一九四七（昭和二十二年）から書いていた資料にも平和祈念像に対する違和感が表現されている。兄はこの資料を同じカトリックで病床生活中の永井隆（注2）に一度見せている。その時、永井隆は兄の資料を見て、「今はこの資料を出してはいけません。今はあなたのごころに保存しておきなさい。後に必ず日の目を見るようになるよ」と言った。永井隆にとつても「平和祈念像」は、その名に相応しい像ではなかったのかもしれない。

戦後、爆心地につくられた「平和祈念像」のことも改めて考えなければならぬということを迎さんの話を通して感じた。

以上のように、一人の被爆者の生活史であり、これだけで「被爆者とは・・・」とか「原爆とは・・・」などと一般化して言うことはできない。しかし、一人の被爆者の生活史に焦点をあてることで原爆が人に何をもたらしたのかその一端が明らかになるように思われる。特に迎さんのような「普通の」被爆者の体験は今後記録されるべきである。

現在被爆者の高齢化が進み、「被爆体験」を直接聞く機会が少なくなりつつある。国際状況が緊張し、戦争が声高に叫ばれている現在、核兵器が人々の身体・生活・心にもたらす凄まじき、悲惨さとそれに対する人間の必死の闘いを理解し、核兵器のない世界を考えるためにも今後一人でも多くの被爆者の体験に耳を傾けたいと思つ。

二〇〇三年二月十日 記

謝辞

お忙しい中、長時間のインタビューに協力していただいた迎洋子さんとインタビューに同席して、いくつかのコメントをしてくださった迎さんのクラスメイトであった平山千枝子さん、そして、迎さん、平山さんを知るきっかけをつくっていただいた野口千寿子さんに心よりの謝意を表します。また、取材に同席して指導いただいた長崎大学・政治学ゼミナール安部俊二教官と同ゼミナール三年生・堀田麻衣子に対しても心より感謝の意を表します。

【注】

- 1 彫刻家。日展名誉会長、日本彫刻会名誉会長、一八八四（明治四十）年、南高来郡南有馬町白木野に生まれる。長崎市の依頼により「平和祈念像」の制作に着手。独自の石膏直付け法を駆使し一九五五（昭和三十）年に完成。『長崎県大百科事典』長崎新聞社・一九八四年・一九九頁
- 2 一九〇八年～一九五一年（明治四十一年～昭和二十六年）。医師、原爆作家。島根県松江市生まれ。一九三二年（昭和七年）長崎医大を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰

還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に軍医中尉として中国各地に転戦し一九四〇年帰還した。医学博士となったが白血病に冒され、一九四五年八月九日医大で原子爆弾により重傷を負いながら救護活動に挺身した。翌年教授になったが白血病に倒れ、病床で執筆した原爆の手記を「東京タイムズ」に発表して認められ、『ロザリオの鎖』『亡びぬものを』『生命の河』『長崎の鐘』『花咲く丘』『いとし子よ』など多くの作品を発表し、祈りと平和を訴え続けた。(『長崎県大百科事典』長崎新聞社・一九八四年・五九五頁)

年代	原爆関係	迎洋子さん
一九三九年	<p>広島(八月六日)・長崎(八月九日)に原子爆弾が投下される</p> <p>原爆傷害調査研究委員会の長崎設置</p>	<p>長崎市に生まれる</p>
一九四五年		<p>自宅二階で被爆</p>
一九四六年	<p>長崎原爆病院が完成</p>	<p>稲佐小学校に入学</p>
一九四八年		<p>淵中学校に入学</p>
一九五二年	<p>原子爆弾被害者の医療等に関する法律の制定公布</p>	<p>長崎女子商業高校に入学</p>
一九五五年		<p>本村鉄工所の事務員になる 父が倒れる</p>
一九五七年	<p>長崎原爆病院が完成</p>	
一九五八年		

一九五九年	<p>体調に異変がおこる。福岡の療養所に入院・退院。その後長崎大学病院で検査・入院を繰り返す。</p>	
一九六四年		結婚。佐世保に住む
一九六五年		第一子長男誕生
一九六七年		第二子次男誕生
一九六八年		<p>原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律の制定公布</p>
一九六九年	長崎に帰る	
一九七一年	<p>妹の久美子さんが突発性脳出血で二回手術をし、左半身麻痺、右目失明になる。</p>	
一九八五年	妹を引きとる	

一九九〇年	網膜剥離になり、入院。両目手術。 妹を原爆ホームにあずける。
一九九三年	右目を手術する
一九九四年	左目を手術する
一九九六年	夫が左肺を二分の一切除
一九九七年	左目を手術する